

第32期第8回 京都市社会教育委員会議の模様を マナビィがレポート！



平成29年6月8日（木）午後2時～4時、京都市生涯学習総合センター（京都アスニー）にて、第32期京都市社会教育委員の第8回会議が開かれました。今回も、わたくしマナビィが、会議の模様をレポートします。

出席委員（15名）

井上 章一 委員, 井上 満郎 委員, 大八木 淳史 委員, 奥野 貴史 委員, 齊藤 修 委員,
佐伯 久子 委員, 白井 皓大 委員, 鈴木 ちよ 委員, 園部 晋吾 委員, 西脇 悦子 委員,
橋元 信一 委員, 森 江里子 委員, 森 清顕 委員, 安成 哲三 委員, 吉川 左紀子 委員（以上、五十音順）

■ 開 会 [井上議長]

社会教育委員会議は1期2年。
第32期最後の会議だったこの日、2年間を振り返って、
第33期へ向けての提言をいただきました。



■ 議 事一1 第32期の審議内容を振り返って、第33期に向けての提言

○ 井上 章一 委員（国際日本文化研究センター教授）【欠席のため事務局から紹介】

ながらくお世話になりました。欠席しがちで最終回まで休んでしまい、大変申し訳ございません。色々
と場違いなことを口走ってきたかと思えます。ただ、お役所には馴染まない言葉を聞いていただくこと
にも何ほどの意味はあったかと存じます。扱いにくい私とお付き合いいただき、誠にありがとうございました。

○ 白井 皓大 委員（市民公募委員）



僕自身、大学院で1967年から1978年頃の京都市教育委員会が行った
社会教育事業について研究をしており、そういう昔の社会教育しか知らな
かったのですが、社会教育委員会議に参加できたことで、現在の社会教育や京都市
のことについて知ることができたのはとても良かったと思っています。

ただ、委員として参加する中で「社会教育とは何なのか」ということや、各
回の議題がどういった意味で社会教育と呼べるのかが、自分の中で茫漠として
しまった感がありました。

○ 齊藤 修 委員（株式会社京都新聞ホールディングス顧問）



携帯情報通信機器についてですが、現在メディアは大変進歩しておりイン
ターネット、特にスマートフォンは最強メディアとも言えると思いますが、生活
必需品になっていきます。

しかし、最強であるだけに良い面ができれば極端に良いのですが、逆にマイ
ナスの面はものすごくマイナスになってしまう。すでにいくつか問題が生じて
いると思いますが、どのようにコントロールしていくのが重要だと思います。

最近のニュースの報道によれば、現在は2歳児のスマホ利用率が30.7%であるような時代であり、
社会教育委員会議でも最強メディアであるスマホについて取上げていただき、様々な分野からのご意見
をいただければと思いますし、私自身も関心を持っていきたいと思っています。

○ 鈴木 ちよ 委員（市民公募委員）



委員になる前に考えていた以上に、教育の多様な面や重要性を知ることができた2年間でした。中でも、昨年行われた千葉での社会教育研究大会への参加は貴重な経験になりました。全国各地の地域の特性を活かしながら、リソースの制限等を考慮しつつ、その土地ごとの教育資源をどのように活用するのかを、社会教育委員の方々が真摯に考えていることが分かり非常に感銘を受けました。

市民委員としてこの会議に参加するにあたって、なるべく市民委員の立場、教育を受ける立場や着眼点からの発言をするよう心がけてきました。今後の社会教育委員についても、小中学生や中高年の学びというのも勿論大事ではあるのですが、学校を離れた若年層の学びや教育の時間や機会が社会的に必要なようになってきているように思いますので、働き盛り・若年層からの参加を一定程度確保していくことが必要ではないかと思えます。

私自身社会人になってから大学院に入学し、学生の時とは違う学びに対するモチベーションを感じるとともに、学んだことを実際の仕事にフィードバックできている実感があり、好循環になっていることを感じました。働き盛りの世代こそ、仕事を離れた場での学びの機会があれば、ワークライフバランス的にも良いのではないかと思います。一般企業においても、学びや教育に出ていく機会や時間を担保できるようにすると良いのではないかと思いますし、今後の社会教育委員会議で取り上げていただければ幸いです。

○ 稲垣 恭子 委員（京都大学大学院教育学研究科長）



私自身、教育学部に在籍しているため「教育」や「学び」に近い立場にありますが、敢えて「学び」と言わなければならないということに少し苦痛を感じることから、個人的には「学び」という言葉が実はあまり好きではありません。学ぶということが嫌いなのではなく、「学び」という言葉が強調される時に義務感を感じることに抵抗を感じるのです。主体的に学ぶことこそが「学び」であると思えます。

私は「京まなびミーティング」事業で、学校歴史博物館で講演させていただいたことがあります。たくさんの方々積極的に聴講して下さったとともに、講演後に参加者がわざわざ私の所に来て下さり、様々なディスカッションを行うこともできました。

京都にはもともと社会教育の土壌がある場所だと思いますので、敢えて「学び」を意識しなくても、自然にそういう場を持つことができ、楽しくいられるものだなとあらためて思いました。京都ではわざわざ啓発等をしなくても楽しく学べる土壌があるのだと思います。

○ 安成 哲三 委員（総合地球環境学研究所所長）



社会教育とは、学校教育以外での「学び」や「教育」であると理解しています。総合地球環境学研究所は社会教育とかけ離れた研究機関であると認識されている方が多いと思いますが、実は英名では「Research Institute for Humanity and Nature（直訳：人間と自然に関する研究所）」でして、人間と自然との関わり合いを様々な視点から研究しており、当然社会という視点も含まれています。よく持続可能な社会と言われますが、我々は「未来可能性」という言葉を使っています。「持続可能性」という言葉は現状を維持するというニュアンスが強いですが、そうではなく、現在の問題を積極的に変え新しい社会をつくるという「未来可能性」という考え方を我々は持っています。

社会教育に関しましては、子どもと中年層・高齢者といった世代間の交流が必要ではないかと思えます。例えばアスニーの催しでも、その参加者の多くが高齢者です。地球研の一般市民を対象に開催する

セミナーなどでも参加者の多くはご高齢の方で占められています。本当はもっと若い方や子どもたちに参加してもらいたいと考えています。

ご高齢の方は多くの知識・知恵をもっておられますので、子どもたちと関わるのが重要だと思います。放課後まなび教室が議題に挙がったこともありましたが、朝から夜まで子どもだけで過ごすことになり、学校外の人との関わりの場が減ってしまっているような気がしています。

社会教育の意味を広くとらえた時に、世代間交流の機会をできるだけ多く持てるようにすることが必要だと思います。異なる年代・分野・職業の人々の交流する場づくりや、世の中には様々な人間がいるのだと、子どもも大人も知ることのできるようにすることが重要で、社会教育の第一歩ではないかと思っています。

○ 森 江里子 委員（洛央小学校長）



先日私の学校で2020年に向けて先生としてどのようなことを大切にするのかを話し合う機会がありました。まず、命の大切さやいじめのない学校を目指すという「危機管理」が挙がり、2つ目は「授業」のことでした。新学校指導要領には「深い学び」と「多様な学び」ということが謳われておりますが、この2つは密接につながっています。チーム学習を行った場合、チームで話し合うだけでは「深い学び」にはなりません。子どもたちだけで学ぶのではなく、地域の方などと触れ合うことや、実際に見学に行き、関係者から聞き取り調査をし、その結果をまとめ発表するといったことができた時に、子どもたちは本当に「深い学び」「多様な学び」をしています。加えて、私は「知的好奇心」が大切であると思っています。学校の中に居るだけではなく、地域の方、社会全体で色々な分野で活躍されている方のところに、自分からすすんで勉強をしに行くという姿勢を育むことが重要だと思います。

また、今月（6月）は環境月間として、「森先生の話す鴨川の話」ということでクイズを交えつつ話をしましたところ、1つ子どもたちの心にヒットした話がありました。皆が飲んでいる牛乳を魚が住める川にするためにはお風呂の水が何杯必要か？という質問をしたところ子どもたちはよく分からない様子で、10杯以上必要だと教えたところ、その日の給食でいつも牛乳を飲めない生徒が、川を守るために牛乳を全部飲んだということがありました。こういった機会・体験をもっと深めるとともに、こういった話は地域にも発信していきたいと考えています。

○ 奥野 貴史 委員（平成27年度京都市PTA連絡協議会会長）

今年度は人づくり21世紀委員会の幹事長としても活動させていただいたのですが、「人づくり」というのは生涯学習の側面があり、人づくり21世紀委員会代表の尾池和夫先生は、「人はつくるものではなくつくられるものである」といつも言っています。先ほど安成委員から世代間交流が必要だというお話がありました。PTAの役員をしておりますと、親同士の交流というものがないということを実感します。生涯学習にはどうしても年配の方がするものとのイメージを持ってしまいましたが、そうではなく我々現役世代も学習する場を創っていかねばならないと思います。



私は学校運営協議会と放課後まなび教室にも関わっているのですが、学校運営協議会は学校にとってとても良い組織です。ただ、7年関わってきた中で子どもと地域のためにもう一步踏み込んだ取り組みをするべきではないかと思うようになり、校長先生と一緒に進めています。また、放課後まなび教室については、ボランティアの先生方は一所懸命に取り組んでおられるのですが、子どもから様々なことを要求されます。加えて、その親御さんからも多くのことを要求されることがありとても大変です。どちらの取組からも親同士の横のつながりや昔ながらのコミュニティを創ることで、色々なことがやりやす

くなる社会になるのではないかと考えるようになりました。

私は色々な所で親同士の交流が必要だと訴えています。今は共働きで忙しい親御さんが多く、そういう時間をとるのが難しいというのが実情です。私が参加している学校運営協議会を見ても、中心的な役割を果たされている方は70歳以上の方がほとんどであり、若手は自分を含めて数人しかいません。それが1人でも2人でも増えてくれればと思っています。

○ 佐伯 久子 委員（京都ユネスコ協会会員）

私自身、地域のおばさんでもあり、主婦でもありますので、そうした目線でこの会議に出させていただいています。

学校関連のことでは、今はもう電話による連絡網が存在せず、メール配信での情報共有が一般的になっているかと思います。何かあった時の学校からの情報は教職員からの一斉メールで知ることになっています。そうしたことから、保護者同士のつながりというものが無くなってきているように思います。



私の学区では世代間交流を進めようということで、毎年中学2年生を対象に「地域のおじさんおばさんと話そう」という取組を、地域の方とPTAが中心になり行っています。また他の小学校では10歳になったら^{はたち}二十歳の2分の1ということで、自分の決意を話すという取組も行っています。

私も学校運営協議会に参加させていただいているのですが、委員になる際、学校運営協議会についてあまり説明を受けずに就任しました。この会議で学校運営協議会について取り上げていただき、それ以前は各学校それぞれ方向性が違うので発言をためらっていたのですが、学校を自分たちの思いで良くしていくために発言できることがとても勉強になりました。

加えて、井上章一委員のユニークな発言内容にも刺激を受けました。今後も京都らしい社会教育委員会議となればいいのではないかと思います。

○ 森 清顕 委員（清水寺執事補、上智大学グリーンケア研究所非常勤講師）



私の2歳になる子どもがスマホの操作を見よう見まねで覚えてしまったようです。よその親御さんのお話では、指紋認証なども寝ている親の指にあてて解除してしまう、などということもお伺いしたことがあります。

私は40歳ですが、大学生のころにやっとパソコンが広がりだしました。当然、学生時分には情報教育の授業などありませんでした。今の子どもたちは、生まれた時から身の回りにスマホやパソコンなどの情報機器が当たり前で存在している社会で育っています。このことを考えると、親として子どもの情報機器への接し方に適切に対応をしていけるのか不安に思います。この社会教育委員会議でも取り上げていただきましたが、情報機器やその活用の仕方は時を経るごとに進化していますので、定期的に取り上げていただいた方がいいのではないかと思います。

また、私の子どもの頃と今はだいぶ違い、子どもの遊び場がなくなってきていると思います。世代間の交流は大事だとは思いますが、今は隔絶されていて、昔は遊び場があって顔を見ればどこの子が分かったのとは大分異なっています。例えば新しくマンションがたくさん建って、新しい人々が色々なところから引っ越してきて、新しいコミュニティをつくるということは困難なことだと思います。だからこそ、その人々をひっつける場をつくっていくことが現代の社会教育にとって重要だと思います。

加えて、大阪のイベント会場には託児施設があることが多いのですが、京都の博物館・美術館・ロームシアターなどには託児施設がありません。有料だとしても設置することで親御さんや若い世代などが出かけやすくなるのではないかと思います。

最後に、33期への提言といたしましては、私自身お寺の世界しか知らない中で、学校運営協議会などの現場の空気感を把握しきれていないところがあり、可能であれば実際に見る・触れる機会があればいいのではないかと思います。

○ 橋元 信一 委員（日本労働組合総連合会京都府連合会会長）



この会議では「学び」について多岐にわたって議論がされていますけれども、私の立場からお話しさせていただきますと、多くの中卒・高卒の若者が働くことについての知識が不足していることが指摘できます。私どもは労働相談を受けているのですが、毎年若者からの相談が増えており、現在は特にブラックバイトについての相談が多くなっています。

その一例ですが、塾講師のアルバイトをしている大学生からの相談で多いのですが、事前に何コマ働くという契約をしていなかったために、勤務場所に行っても生徒が来なければその分の給金が支給されないという案件あります。こういった事前契約の不足した案件が多いのです。この背景には、全国の労働者の4割が非正規であり、その収入は年収200万円を切っているという状況があります。さらにこの非正規労働者の半分以上が自宅から勤務場所へ通勤しており、そうすると家賃・光熱費・食費が要らないわけで、40歳近くの方が多く、少子化にもつながっているのです。働き方については種々改善の取り組みがなされていますが、中卒や高卒などの若者に対する、働くことについての教育をもっと行っていく必要があると思います。

○ 大八木 淳史 委員（ラグビー元日本代表、丸貴管鋼株式会社顧問）

私はラグビーを37歳で現役引退したのですが、その際、人生の次のステージに進むにあたっての目標・やりがいなどを考え直すことができました。自分の人生を振り返ると、一番欠落していたものは勉強・学問でした。40歳を過ぎたころに同志社大学大学院の総合政策学部に戻り、自分の経験を踏まえ社会に貢献できる研究テーマを考え、スポーツを心・技・体がうまくバランスのとれた装置とし、ソーシャルキャピタル（社会関係資本）形成の一助とならないかを研究テーマとして追究し発信しています。



社会教育委員を務めるにあたり、5年間教育についてフィールドワークとして、高知県の高校にラグビーというスポーツを持ち込み、生徒がどのように変化するのかを検証したところ、ラグビーをすることが好きになり技術面の指導に重きが置かれるようになってしまいました。次の段階として、教育現場で何ができるのかと考え5年間のうちに私立中学校の校長や幼稚園長、理事長といった様々な役職を務めさせていただきました。

昨年ラグビーワールドカップの2019年開催の決定や2020年東京オリンピック開催といったニュースに触れ、教育現場に留まるのではなく、一度自由度のきく大学という場に戻り、教育とスポーツの結びつきについて研究をしています。

先日引退した浅田真央選手の、生まれ変わったらもうフィギュアはしません、ケーキ屋さんになります、という言葉にあるように、トップアスリートというのは様々なものを犠牲にしたうえで現在の自分があることを自覚していますので、今とは異なる自分を見つけることを望むことが多いのです。

昨今の社会情勢を見ますと、アメリカのトランプ大統領然り、北朝鮮然りなのですが、国境間の問題が噴出しています。こういった国境間の問題や、異なる世代をつなぐその緩衝剤として、スポーツという装置を活用できるのではないかと思います。そして私自身、この問題を今後研究していきたいと考えています。長きにわたり社会教育委員として提言などをさせていただきながら、まず私自身が各委員の御意見を聞き、多くのことを学ばせていただきました。

○ 園部 晋吾 委員 (NPO 法人日本料理アカデミー地域食育委員会委員長, 山ばな平八茶屋若主人)

私は「学び」と「教育」は異なるものであると思っています。「教育」には正解・不正解が存在し絶対的なものである一方、「学び」は正解のないものだと考えています。「学び」には与えられた情報などに対して、受け手側にどのように解釈してもよい自由があると思っています。いつの時代であっても、子どもたちは教育された通りの大人に成長します。これが、教育が重要な所以であると思っています。



先ほど学ぶ機会や気持ちが少ないというお話がありました。食育に取り組んでいてよく言われるのが、子ども向けではなく大人向けに開催するべきだというご意見です。しかし、大人向けに開催すると食育が必要のない方ばかりが参加され、知っていることの再確認に終わってしまいあまり意味がありません。興味のなかった人に参加してもらい何らかの気づきを得てもらうことが大切なのだと考えていますが、案内をしても参加してもらい難いのが現実です。また大人は自分の興味関心事が固まっており、興味のない人に食育の話をしてできない理由を様々に並べられて終わってしまうのです。そうしたことから、白紙の子どもたちを対象に開催し、少しでも子どもたちの記憶に残り、考え方の1つの糧になればと思っています。食育について私たちは「教育」とは考えておらず、あくまでも私たちの考えや思いを伝えるという考えで接しており、その後のことは子供たちに任せています。教えられる側よりも教える側により多くの学びが必要となるので、学校教育においても、高学年が低学年に向けて教えるといった取組を行うことも必要ではないかと思えます。

また昨今、人間関係の希薄化が課題となっていますが、社会の中で法律や規則などで縛られることが多くなればなるほど、人間関係は希薄になるのではないかと考えています。市教委の職場体験の取組で学校から生徒を受け入れる際に、生徒の個人情報保護について誓約書を学校から求められます。大変疑問を感じたので、「学校がされようとしていることは、私が企業秘密について同様な書類を学校や生徒保護者に求めることと同じですよ」とお話ししました。私が申し上げたかったのは、「誓約書は何かが起こった時に裁判での根拠になるけれども、そういうことではなく、何かあった時には学校側と私どもが話し合って解決していくことを前提とし、信頼関係を築くことが必要である」ということでした。書面や規則で何もかも縛ってしまうことは、人間関係を希薄化させてしまうことだと思うのですが、結局、双方が誓約書を提出することになりました。

また、昨今は学ぶ機会や子どもを育てる環境がないとよく言われますが、それぞれ価値観は違いますし、私は何を大事にするのが大切ではないかと思えます。今の子どもたちは「皆がしていたから」「誰かに言われたから」とよく言います。これは日本社会の風潮になってしまっていて、大変な問題だと思います。子どもたちが自主性を持つことがとても大事だと思います。なぜそうしたのかを問うた時、「自分がいいと思ったから」と答える子どもを増やしていくことで、自分の行動・発言に責任を持ったことが育っていくのではないかと思えます。

○ 吉川 左紀子 委員 (京都大学こころの未来研究センター教授・センター長)



私が所属しております京都大学こころの未来研究センターでは、研究と教育と社会発信の3つをバランスよく行っており、一般市民向けの公開授業も年間10回以上行っています。

私は北海道出身でして、北海道と比べますと、京都は伝統文化などのリソースが本当に豊富だと思っています。京都ならではのこの特徴を京都市民に周知するとともに、社会教育に活かすことが求められていると思います。

また、他都市での社会教育についても調査・観察し、京都との比較を行い、自覚したうえで活かすことも効果的だと思います。私自身、早く定年になって京都中を学び回りたいと思っています。本当に神社・お寺ひとつとっても歴史があり楽しむことができ、京都市民に京都がそう

いう場所だということを知覚してもらい仕組みをつくるだけでも効果はあるのではないかと思います。

昨年こころの未来研究センターでは、フランス人のイヴ・ジネスト氏を講師に「ユマニチュード」という認知症介護の方法についての公開講座を行いました。「ユマニチュード」とは、イヴ・ジネスト氏が開発し、東京医療センターの医師である本田美和子氏とともに今広めようとしている介護方法です。NHKの番組でも取り上げられていましたのでご存知の方もいらっしゃると思います。北は東北・南は鹿児島からの約200人の応募がありました。専門家の方に来ていただき講演自体もとても良かったのですが、受講者同士のコミュニケーションが活発でした。

現在、私にとって介護方法を学ぶということが自分自身の社会教育であるのですが、ユマニチュードについては私自身も何度か東京医療センターでの講習を受け、今後自分が介護される身になった時には、ユマニチュードという介護方法を受けたいと思うようになりました。多くの方が介護される身になるので、多くの方々にもユマニチュードについて知っていただきたいですし、京都市としても伝える機会を提供して欲しいと思います。

私たちは心を豊かに生きられる社会をどうつくっていくのか、という大きなテーマに向かって様々な公共政策や事業をしていくわけですが、その中で、社会教育が持つ「学ぶ楽しさ」や「生きる楽しさ」をできるだけ沢山の人の心に伝えていくという非常に大事な使命があります。その点、他都市に比べて京都市にはそういうことを可能にするリソースがずっと豊富に蓄積されているので、それらを活用できるしくみをつくっていく必要があると思います。

○ 西脇 悦子 委員（京都市地域女性連合会相談役）



私は女性会に関わっておりまして、生涯学習団体として社会教育をいかに会員に広めていくのかということが使命であると考えております。また、学校の評議員も務めておりますので、地域へ開かれた学校ということで提言もさせていただいております。

私が評議員を務める小学校は5つの元学区が統合した学校であり、中学校になると19の元学区が統合されています。そうしますと各学区・地域のカラーが様々であり、地域の方々が求めること、学校に求められていることを取りまとめていくことが私の仕事ではあると思っています。

地域活動では、文化度の高い地域生活について情報発信等の取組も行っております。文化は個人が日々の生活中で育み、地域社会の中で創られるものですから、皆で相談をしながら取組を進めております。

「学び」は構えるものではなく、自然体の中で自ら行うものだと思います。また、自然体の中で次の人へ易しい言葉で伝えていくものでもあると思っています。現在は、紙媒体からネットなどの電子媒体へと様々な物が移っております。様々な講座などもインターネットなどで、大人だけでなく子どもまでも対象として開催されるような時代です。現代の子どもたちを取り巻く社会環境などについても理解を深め、女性会の会員をはじめ地域の方々に対し発信していきたいと思っておりますし、これからも地域のために様々な事柄に取り組んでまいります。

○ 井上 満郎 委員（京都市歴史資料館長、京都市埋蔵文化財研究所長、京都産業大学名誉教授）



教育とは、互いが互いを育むものであり、例えば小学生に教えていても小学生から教えられることもあり、所謂上から目線ではなく、各々が同じ立場に立って、これからの社会教育というものを進めていければと思っています。

1960年代は大学進学率が10%台だったのに対し、現在は50%を超えています。社会状況に合わせて社会教育を適応させてゆく努力が必要だと思っています。社会教育の場の設定などは、京都市教育委員会だけではなく、日本全体で取り組まねばならない問題であろうと思うのですが、日本全国には地域

ごとに特性が有り、各々が自分の地域に籠るのではなく、自らの特性を活かしつつ、外部との接触の中でより良いものにしていくべきであると考えています。

また、学校という1つの箱・場を離れた人々に対する我々の働きかけの在り様には今後も、検討の必要があると思いますし、学齢期の児童・生徒に関する事案として当会議において、「塾」についてこれまで議論したことはなかったと思いますが、塾に通う中高生の数の多さを考えると重要な事案だと思しますので、今後議論すべき問題ではないかと思っています。

加えて、当会議で幾度が審議してきましたが情報メディアに関しては、便利ではありますが誤った情報が広まるなどの危険性が有ることや、利用者に情報の取捨選択をする技術が必要です。今後も、議論していく必要性のある事案であり、次期の社会教育委員会議でも取り上げていただきたいと考えています。

■ 議 事一 2 「平成29年度指定都市社会教育委員連絡協議会（熊本市）」及び「第59回全国社会教育研究大会北海道大会」への出席者について

■ 報 告一 1 「京^{みやこ}まなびミーティング」について (事務局から)



「京(みやこ)まなびミーティング」では、委員の方々が、その専門性や経験を生かし、講演等を行っています。これまで実施された内容は[こちら](#)から御覧になれます。

2017年4月7日、京都アスニーの人気講座「ゴールデン・エイジ・アカデミー」(※)とタイアップし、井上満郎議長に「東アジアのなかの日本 一秦氏の京都渡来一」と題して御講演いただきました。

日本は、海によって隔てられ、日本の中でだけ、歴史と文化を形成してきたと思われることが多いのですが、日本では古い時代から東アジアと交流し、北や南から海流を使って人々や文化が渡って来ており、文化や歴史が形成してきたこと。また、今から1500年前に朝鮮半島から来た秦氏という渡来人が京都に先進的な土木灌漑技術をもたらし、京都の歴史と文化を前に進め、その功績は現在に至るまで受け継がれ大切にされていることなど、日本と東アジアとの交流について講演いただきました。

〔 ※ ゴールデン・エイジ・アカデミー
京都市に在住または通勤・通学されている方のための無料教養講座。詳しくは[こちら](#)。 〕

日本と東アジアとの関わりについて、渡来人である秦氏が、今から約1500年前に京都へもたらした先進的な土木灌漑技術などを題材に、丁寧にご説明いただきました。講演の様様(動画)とレポートは、[「京まなびネット」](#)で公開中です。



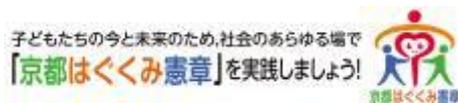
■ 報 告一 2 子ども若者はぐくみ局の創設について (事務局から)

- ・ 昨年度の会議でも中間報告させていただいておりましたが、子ども若者はぐくみ局の新設という8年ぶりの大きな機構改革を行ったところです。子どもや若者に係る行政施策をできるだけ縦割りを排して推進する体制を構築いたしました。所管業務につきまして、京都はぐくみ憲章・京都はぐくみネットワーク(旧 人づくり21世紀委員会)・みやこ子ども土曜塾などを教育委員会から子ども若者はぐくみ局へ移管しました。また、スポーツ少年団・成人の日記念式典・放課後まなび教室・こどもみらい館・私立幼稚園に関する事務などの業務につきましては、子ども若者はぐくみ局の所管としつつも、教育委員会と連携を取りながら行っていく予定です。さらに、平成29年度・スタートの年にあたり力を入れることとして、概要としては、保育所の待機児童ゼロに向けた取り組みの継続、放課後の学びの場・居

場所作り，貧困家庭の子どもなど様々な困難を抱えた家庭への支援の充実，未来を担う若者の活躍の場作りといった，子ども若者のための施策を京都市一丸となって取り組んでいくという計画です。また，「子どもはぐくみ室」を創設し，こちらでは「子育て支援コンシェルジュ」として，子育てに関する相談・手続きに一元的に対応しています。

■ 報告一3 京都市はぐくみ憲章 平成29年度「行動指針」について

- はぐくみ憲章の「行動指針」は毎年定めていますが，29年度につきましては，憲章制定10周年にあたり原点に立ち戻りまして，「Let's はぐくみアクション！」というテーマを設定し，これまでのように「重点行動」を選ぶのではなく，行動指針すべてに焦点を当てていくことで，すべての市民がそれぞれの日常生活の中で憲章を意識した実践行動（「はぐくみ活動」）を進めていただくことを目指しています。今後はリーフレット配布等により周知に努めていきます。



↑詳しくは[こちら](#)

■ 報告一4 「京都市はぐくみネットワーク」の発足について

- はぐくみ憲章制定10周年・はぐくみ局設置を契機としまして，20年の歴史を持つ教育委員会主体の「人づくり21世紀委員会」と保健福祉局主体の「京都子どもネットワーク連絡会議」を融合した新組織「京都市はぐくみネットワーク」を平成29年6月から発足させました。7月10日には発足式を予定しております。市民の皆様と共にはぐくみ文化の振興の気運を高めていきたいと思っています。

■ 主催事業及び刊行物の案内について

■ 閉会 [井上議長]

■ 閉会挨拶

閉会に当たり，在田正秀 教育長から挨拶がありました。

